

丸谷才一

桜も

さよならも

日本語

丸谷才一

桜も

さよならも

日本語



桜もさよならも日本話

印刷——1986年1月20日

発行——1986年1月25日

著者——丸谷才一（まるやさいち）

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

郵便番号162／東京都新宿区矢来町71

電話／業務03（266）5111 編集03（266）5411

振替東京41808

印刷——大日本印刷株式会社

製本——大冢製本株式会社

定価——950円

© Saichū Maruya Printed in Japan. 1986
ISBN4-10-320604-7 C0081

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

桜もさよならも日本語●目次

I 国語教科書を読む

7

1 分ち書きはやめよう

8

2 漢字配当表は廃止しよう

12

3 完全な五十音図を教へよう

15

4 読書感想文は書かせるな

18

5 ローマ字よりも漢字を

22

6 漢語は使ひ過ぎないやうに

25

7 名文を読ませよう

28

8 子供に詩を作らせるな

31

9 古典を読ませよう

36

10 話し上手、聞き上手を育てよう

39

11 正しい語感を育てよう

42

II 言葉と文字と精神と

47

III 日本語へらず口

147

させていただく

148

字音語考 157

郵便語と鉄道語 166

巨人の腹 175

IV 大学入試問題を批判する 185

慶応大学法学部は試験をやり直せ 186

小林秀雄の文章は出題するな 203

附録1 歴史的仮名づかひの手引き 215

附録2 和語と字音語の見分け方 223

わたしの表記法について 227

あとがき 228

初出一覧 233

装幀 ● 和田誠

桜もさよならも日本語

I

国語教科書を読む

1 分ち書きはやめよう

十何年ぶりかで、小学校、中学校の国語教科書をまた一通り読んでみた。(前回の読後感は『日本語のために』所収『国語教科書批判』)。すこしはよくなつた面もある。相変らずの面もある。新しく生じた欠点もある。それに、批評する側のわたしが、前には見すごしたのに今度は気にかかることもある。さういふ問題点を書きつけてみよう。

改良されたことの代表は、中学校の教材に恋愛が取り入れられたことである。たとへば教育出版の『中学国語』3、学校図書『中学校国語』三は、島崎藤村の『初恋』——「まだあげ初めし前髪の／林檎のもとに見えしとき／前にさしたる花櫛の／花ある君と思ひけり」——を載せてゐる。三省堂『現代の国語』中学3には、小野小町の恋歌、「うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき」がある。東京書籍の『新しい国語』三は阿部昭の『あこがれ』、光村図書の『国語』三は辻邦生の『夏の海の色』を採つてゐる。この二つおよび『中学校国語』二の『初恋』は、いづれも中学生の恋をあつかつた短篇小説である。そして『国語』一の『赤い実』と『中学校国語』一の『わな』(これは井上靖の同一作品)は、小学生の男の子の淡い恋こ

ころをとらへてゐる。

これではあまりにも僅かすぎて、申しわけ程度にすぎないとも言へるが、それでも昔にくらべれば非常な進歩である。とにかく、人生には恋愛といふものがあることを認めてゐるからだ。

相変らずのほうはいろいろあるが、一つだけあげれば、外国人名の表記に当つて、世間の慣行どほりにナカグロ（・）を用ゐず、いまだに文部省内の書式にオベツカを使つて二本棒（＝）を入れてゐるのには驚いた。つまり、アンリ＝ファールとかダニエル＝デフォーとかやつてゐるのである。国語教科書編纂（^{へんさん}）の目的は、子供たちが将来、文部官僚になつたとき、まごつかないやうにすることなのだらうか。

小学校の教科書で間違つた語法を教へてゐるものが二つあつた。これは以前は見かけなかつた現象で、わたしはまづ眼を疑ひ、次いで暗然とした。

たとへば東京書籍『改訂新しい国語』三上の『タンボボ』といふ詩（？）は、

だれでも タンボボをすきです

どうぶつたちも 大すぎです

とはじまる。この「タンボボを」といふテニヲハは誤りで、「タンボボが」とするのが正しい。また、日本書籍『しょうがくこくご』一ねん上の『あるいて いこう』は、

むかし むかしの ことでした。

おやゆびたろうが ありました。

といふ書き出しである。親指太郎は人間なのだから「おりました」にしなければいけない。「ありました」では彼が物になつてしまふ。いづれも初歩的な誤りだし、百歩ゆづつてかういふ言ひまはしが成り立ち得るとしても、こんな特殊な語法を教科書に採用するのは不思議な態度である。どういふつもりで載せた文章なのか、説明を聞きたいものだ。

前には見すごして今度は氣にかかつたことの一つは、小学校一年、二年の教科書がすべて、分ち書きで書かれてゐることである。たとへば、光村図書『こくご』一上の『おむすび ころりん』。

むかし むかし、ある ところに、おじいさんと おばあさんが いました。

ところが同じ教科書の、子供の作文を筆記体で示すところのページでは、「ぼくは、しんごうのかかりになりました。」といふ具合に、つづけて書いてゐる。文部省の『検定基準実施細則』では、「分ち書きの採用は、小学校低学年における読解の便宜のためのみにとどめるものとする」とあるから、それによるのだらう。しかしわたしは、読ませるときは分ち書き、書かせるときはつづけ書きといふ二本立てはをかしいと思ふ。日本語は普通、分ち書きはしないのだから、その慣例を最初から教へるのが正しい。はじめに変な書き方を見せる法はなからう。

日本語が分ち書きしなくてもいいのは、一つには、漢字を適当にまぜるため、語と語との区別

が明らかになるからである。従つて、漢字を教へないうちに読ませる文章で分ち書きしないのは、ちよつとむづかしいかもしれない。だが、これは多少の工夫で何とかなるはずだ。たとへば東君平が毎日新聞に連載してゐる短い童話は、

ふゆの、さむいときは、みんな、すばやく、あるいていました。

ところが、はるになると、あるきかたが、ゆっくりになります。

といふ具合に、読点を上手に使つて、そこを何とか処理してゐる。この程度の苦勞を、教科書の編纂者が厭がつてはいけない。こんなに読点を打つのはいかげなものと眉をひそめる人もゐるかもしれないが、分ち書きよりはましだらう。それに今の教科書では、漢字をまぜるやうになつても、二年の下までは『実施細則』に義理立てして、分ち書きをやつてゐるのである。

日本語が分ち書きしない理由はもう一つある。どこでどう切るのか、厄介だからである。これにはどの本も手を焼いてゐるやうで、たとへば『おむすび ころりん』では、「……と うたいながら、おどりだしました。」とあるかと思ふと、「……おこめや お金が、ざらざら ざらざら でて きました。」となつてゐる。もし「おどりだしました」が文節なら、「でてきました」だつて文節と言へるはずなのに。こんなふうに大人だつて困ることを子供に納得させるのは不可能である。それならいつそ、読点を多用するほうがいい。

2 漢字配当表は廃止しよう

どの小学教科書でも同じことなのだが、ここでは教育出版『改訂小学国語』3上、『二まいの写しんを見て』を例に取らう。この教材ではまづ、同じ街を歩いてゐる違ふ人々の写真二葉を色刷りで示してから、

右の二まいの写しんについて、次のことをくらべて、ノートに書き出してみよう。(中略)

ノートに書き出したことをもとにして、二まいの写しんについてせつめいする文章を書いてみましょう。

と記してゐる。

なぜ「二枚」と書かないのだらう。なぜ「写真」としないのだらう。なぜ「説明」ではないのか。世の中では漢字を使って書くのに。

これは、「学年別漢字配当表」といふものがあつて、何学年ではこれだけの漢字を教へると決つてゐるせいである。この表に当たつてみると、なるほど、「枚」は第六学年、「真」と「説」は第四学年にある。そこで、規則は守らなければならないから、「二まいの写しん」、「せつめい」とするわけだ。「明」は二年生の分にあるが、「せつ明」はどうもおかしいと判断したのだから

う。

だが、このまぜ書きや仮名書きはいかにも醜惡だし、何よりも日本語の慣行に反してゐる。今の日本では「フォントグラフ」の訳語は「写真」と書くのが普通であり、正式である。「写しん」や「しゃ真」は正しい文字づかひではない。教科書は「配当表」に縛られて、間違つた文字づかひを教へてゐるのである。

このうち「説明」は何とか避けることができる。「二枚の写真を見てわかることを文章に書いて見ましよう」とでもすればいいからだ。しかしこれも、「説明」といふのはしよつちゆう使ふ言葉だから、漢字で教へてしまふほうがいい。まして、「二枚」や「写真」は言ひかへがきかないから、いきなり漢字で教へるほうがいい。どうせそのうち習ふのだから、いま覚えさせるほうが話が早い。まづ「写しん」、次に「写真」では二度手間になる。それに、文字の習得では視覚印象の固定といふことが大事で、それを乱すのはかへつて習得の邪魔になるだらう。

「配当表」に問題があることは、これまでも指摘されてゐる。漢学者、長沢規矩也は、「学年配当は、当時の文部省のお役人〇氏の根拠のない資料に基づいて、省外の迎合的委員がこれをうのみにしたことに始まる。〇氏は漢字についての有識者ではない」と言ふ。小説家、井上ひさしは、「彼等（小学生）は（テレビその他のせいで）漢字に充分に親しんでゐる。その知識は相当なものだ。しかし漢字というものが結構、体系としての構造をもっているのに彼等の知識は雜然たるものだ。そこで漢字をひとつひとつ手ほどきするのと同時に、彼等の知識を体系づけてやるのが大切だろうと考える。ところで漢字を教えるための『目安』の配当表が、行きあたりばったりの無秩序な代物なのである。二年生は『記』や『語』、『読』や『話』を習う。ところが、これら

の字の構成要素である『言』を教わるのは三年になってからだ」と言ふ。それゆゑもつと合理的な「配当表」を作れ、あるいはその「配当表」を単なる目安にせよ、むやみに義理立てするな、といふのが彼らの主張らしい。

これはたしかに傾聴に値する意見だが、しかし教科書関係者の実情を考へると、無理な相談のやうな気がする。長沢や井上ならばいざ知らず、文部官僚に、合理的な「配当表」が作れるものかしら。たとへそれが出来あがつたとしても、それを目安にとどめ、つまりときどき「配当表」に逆らふことなど、教科書会社には可能だらうか。

あれこれ思案したあげくの結論は、いつそ思ひ切りよく「配当表」を廃止するのがいいといふことである。教育漢字八八一字と備考漢字一一五字、合はせて九九六字を、小学校六年のうちにどこでも使つていいことにするのだ。

この手でゆけば、まぜ書きや平仮名書きは消滅する。それに、わたしの見るところ、「配当表」への遠慮で無理に漢字を使つたり使はなかつたりするため、どんよりしてゐる文章がずいぶん多いのだが、これもいくらかましになるだらう。それでは転校生が別の教科書を習ふときに困るなどと言ひ立てる人がゐるかもしれないけれど、そんなのは些細なことだし、正しい文字づかひを教へたり生きのいい文章を読ませたりすることのほうがずっと大切である。事の軽重を見あやまつてはならない。第一、長沢の調べによると、国語以外の教科書は「配当表」にこだはずに漢字を使つてゐるのださうだから、あれは官僚的な自己満足にすぎないのである。さういふものを後生大事にする必要はない。

が、廃止にならないうちはどうすればいいか。答へは簡単だ。「配当表」でまだ教へてならな